



幽山寺へ
行かなければ

川崎ゆきお

「怖い夢を見たよ。いやに生々しい、リアルだ。いや、これは違うかもしれない。やはり夢のような絵空事だよ。夢だから、そもそもが最初からリアルも何も無いが」

「どんな夢ですか」

「幽山寺」

「お寺」

「ありそうな名だろ。実際にあるかもしれん」

「幽霊の寺ですか」

「猫の最後だ」

「飛びますねえ。猫とお寺」

「年取った野良猫は近所から姿を消す。何処へ消えたのかは分からない。全く見かけなくなる。

それが野良猫の最後だ」

「象の墓場のようなものですか」

「だから、猫の墓場だ」

「それが幽山寺」

「夢の中ではね、そんな名前だ。漢字でどう書くのかは分からんが。そこを目指す」

「猫が」

「人だよ」

「ほう」

「夢の中での話だからね。そろそろ私も幽山寺へ行くときがきたと、歩き出すんだ。すると、次の町内にさしかかったとき、同じような人と出合った。一緒に行こうかと誘うと、足が悪いので、足手まといになるから遠慮しますと断られた。それに、こう言うの、知らない人と道行きするものじゃないのかもしれないと思ひ、一人で歩き出した。でもねえ、幽山寺って、何処にあるんだ」

「知りませんよ」

「私も知らない。ただ、歩き出した。次の町内、さらに次の町内。方角が間違っちゃ、先へ先へ行っても無駄だけど、とりあえず浄土を目指した。日が落ちる方角だ。これはカンだ」

「一人嬢捨山のようなものですか」

「爺さんも捨てられるさ。しかし、自主的、自発的にだ。まあ、猫と同じで、猫の墓場までの体力を残した状態で、旅立つんだろうねえ」

「戦艦大和が片道の燃料しか入れないで出撃したようなものですね」

「ああ、帰りは無いが、行き着くまでにガス欠になっちゃまずい。それこそ野垂れ死に、行き倒れだ。そうじゃなく、幽山寺に入山しないといけない」

「何処にあるんです」

「知らない。そんな寺は近所には無いし、何処を探してもないかもしれない。歩いて行けない距離かもしれないしね」

「なぜ、幽山寺なんですか」

「知らない。ただ、幽山寺へ行かなければと思ったんだ」

「夢の中でしょ」

「そうじゃ」

「幽山寺は、何かの置き換えでしょ」

「そうだろうなあ。しかし、私には猫の墓場以外思いつかん。長年飼っていた猫が、年老いて消えたことがあった」

「はい」

「猫の最後はよく分らん。人目にふれぬ場所で、果てるとしても、それなら死骸が見つかるだろう。床下なら死骸だらけになるし、屋根裏なら、匂いで分かるだろ。だから」

「だから」

「この世にはないんだよ。猫の墓場も」

「ほう」

「あっち側への入り口を見つけて、入って行ったんだ」

「幽山寺もそんな感じだと」

「きっと、その入り口から入ると、幽山寺が現れる」

「で、夢ではどうなりました」

「かなり遠いところまで歩いてた。しかし、そんな入り口など見つからなかったので、引き返そうとしたが、帰り道が分からなくなった。これはいい案配になったと思ったよ。もしかして、あっち側へ入り込んだんじゃないかとかね。しかし、幽山寺は出てこない」

「周囲の風景は？」

「知っているようで知らない町内だ。近くにこんな町はない」

「それは夜ですか、昼ですか」

「夢の中なのでな、印象がない。夜なのか昼なのかの。黄昏時かもしれなあ。日差しが眩しいとかはなかった」

「それでどうなりました」

「見知らぬ町内が延々と続いておる。果てがない。方角的には川に出たり、山沿いに出る。別の方角なら海に出る。しかし、ずっと住宅地の町並みが続いているんだ」

「それで」

「そこで覚めた」

「結末はないのですね」

「それで夢の中から持ち帰ったのが、幽山寺だ。そして、合い言葉は幽山寺に行かなければ…」

「まあ、夢ですからねえ、いい加減なものですよ」

「そうだね」